

早春の天候不順が露地作物に影響

～イネの苗管理にご注意を！

異常天候早期警戒情報が関東以西で発令されている。本号が発刊される1日前の4月23日より1週間の平均気温は「かなり高い」確率となっている。4月10日、気象庁からはエルニーニョ現象が夏にかけて続く可能性が高いとの発表がなされており異常な天候に注意が必要だ。関東では4月に入り早朝は肌寒く10℃前後から日中は一気に気温が上昇し20℃超えとなって日格差があり体調管理が難しい昨今だ。2～3月にかけては天候が安定せず東京では桜の咲き始めから「花冷え」となり、葉桜になるまで週末は3回も花見が出来た。この花冷えが関東地域の農作物に影響が出ている。

まず、降雪も少なかった関東は少雨と3月中旬まで暖冬であったため作物の生育が前進し露地作物は豊作となった。(No. 541 3月27日発刊号にて報告) 現在、キャベツやネギは前進出荷による品薄の影響と4月上旬の低温の影響で生育は鈍り販売価格はやや上がっている。関東から東北にかけてこの3月下旬から4月中旬まではしまった冬コートをもう一度出そうかと迷う位の寒さになった日もあった。群馬では大麦において出穂直前のものが3月25日に霜に当たり穂が白化している現象が見られる。

小麦も大半の品種は幼穂形成期に入っており葉先が焼けたり外葉が既に枯れ上がりが見受けられる畑が散見され収量減が否めない。栃木県南地域でも同様の被害が見られ地元では「ちょうちん」と呼ばれている。一般的に麦類は平年よりも早く出穂するものは殻の中は充実していない場合が多い。ちょうちんの中のようにろうそくの芯だけ立っているような状態を比喻した言葉だが今年はそのような状況が目につく。関東北部の山間部では早出しを狙ってトンネル栽培を行う枝豆にも被害が出た。雪は1日ですぐに溶けたものの4月8日に降った季節外れの水を多く含んだ重い雪がトンネルを潰してしまったとの嘆きの声があ



出穂始めの大麦 出穂しているものは白化現象となり既に下葉は枯れ上がりが見える

がっている。東北南部地域では4月10日すぎから湛水または乾田直播栽培がスタートするのだが、同日の降雪により播種が遅れている状況だ。4月10日より早く播種された場合、表土が凍結したり地温が0℃近い播種の温度は発芽率にも影響するだろう。ゴールデンウィークが来る迄はやはり遅霜と4月の降雪は注意が必要と言われていただけにやりきれない状況だ。

露地作物だけではない。これから本格的な田植えシーズンを迎えるわけだが、冬に雪が降らなかった影響が田んぼにも影響が出ている。栃木県北地域では水不足に陥って井戸水が枯れるものも出て来ており、一部の地域では代掻きがまともに出来ないとの声が聞こえて来た。また、去年は水稲も作況が悪かったために種子の充実度が悪く、発芽が緩慢で揃わないとの話も多く聞こえて来ている。出荷元の種子の産地からは発芽を良くするために塩水選を実施し種子の選別を図る事、浸漬時には水温を10℃以下にしない事などと例年になく注意喚起がなされていたほどだ。また、これからは関東以北と九州にかけてはイネの芽出し作業が始まる。種子消毒は充分に行うほうが良いだろう。また、気温上昇によるムレ等、温度上昇による過湿には充分注意頂きたい。

愛知県産イチゴ 「ゆめのか」 (愛知県愛西市)

イチゴはバラ科イチゴ属の多年生植物で、生育に適した環境であれば何年も生育する事ができる。草本性(木質化しない植物。草)の植物であるため本来“野菜”なのだが、可食部が甘いため一般的には果物として扱われることが多い。赤い実の部分が果実の様に見えるが、本当はこの部分は花託(かたく。花びらや雄しべ、雌しべ等が生える部分)が肥大したもので、植物学上は果実とは言わず「偽果(ぎか)」と呼ばれる。またこの偽果の表面に付いている種の様に見える部分が植物学上の意味では“果実”であり「瘦果(そうか)」と呼ばれる。“イチゴ”の語源は、一説では「日本書紀(西暦720年)」に記載された「伊致寐姑(イチビコ)」といわれており、この頃は食用ではなく観賞用であった。現在の食用イチゴが日本で作られるようになったのは約200年以上前(江戸時代末期)にオランダから伝わったとされ日本では現在250以上の品種が栽培されている。

師定(株)、(株)渡辺肥料店にご協力頂き、愛知県で作られた多収品種「ゆめのか」を主に生産されている佐藤氏(愛知県愛西市)を取材させて頂いた。佐藤氏は生産組合の組合長も勤められ、安全安心のイチゴを消費者へ届ける為、こだわりの低農薬栽培を实践され具体策として次の3点を挙げられた。

①不耕起栽培(前作の畝を耕さず、畝を連続して利用する。土壤消毒すれば、連作障害の心配も無い。前作の根が土壤の物理性を維持し、耕さなくても次作の根張りも問題無いとの事。

②農薬を極力使用しないこと(具体的にはコンパニオンプランツ(2種類以上の植物を組み合わせる事で互いの成長に良い影響を与える栽培。イチゴにおいては、ネギを植える事で病害虫を防いだり、匂いで他の害虫を寄せ付けない効果が期待される)と天敵農薬(害虫を捕食する天敵となる昆虫などを用いて害虫を防除する事)を利用する事で化学農薬を使用する量を減らしている)。

③肥料は肥効がゆっくり安定して長く効くものを使い、施肥回数を減らし作業の省力化(化学農薬に掛ける費用を極力抑える分、土づくり資材及び、肥料は良いものに拘り省力化(緩効性により追肥軽減)、秀品率向上を狙っている)。またイチゴを生育する上で重要なポイントとして、天候(日照、温度)に左右されやすい為、特に10月の天候は実をつける花芽(かが)の1番花(1番目に実をつける花)と2番花(2番目に実をつける花)の生育の間隔を一定に安定させる事が、収穫終盤までタイミングよく収穫していく上で重要。そのタイミングがずれてしまうと摘果作業に山谷が生じてしまい、体力的に大きな負担となる。よって電照の利用、生育初期の肥料の窒素成分を抑えること等で生育をコントロールしている。初期に自分の理想とする樹を作ることができれば、収穫後期まで安定した収穫がほぼ約束されるとの事。

「ゆめのか」は、愛知県が2007年に登録した品種で、“みんなの夢が叶う美味しいイチゴ”という意味を込められている。特徴は次の通り。◆甘さと酸味のバランスが良く、果汁多め◆比較的大粒◆多収で樹勢が強い。特に肥料の窒素成分を良く吸収し生長が促進するため、初期の肥料は窒素成分は抑え目で、且つ後半までじわじわ効く肥料が望ましい◆イチゴに多い「うどん粉病(施設)」に強い品種。(但し先に言う樹勢の強さから株元の通気性が悪くなり易く「炭疽(たんそ)病」にならないよう注意が必要)◆実が適度に硬く、棚持ちが良い。(収穫から店先に並ぶまで早くて3日かかる。輸送など物理的ストレスに強く、棚持ちが良いことは市場に好まれるポイントの一つ)。



ゆめのか

愛知県において、尾張地区(県北西部)では「ゆめのか」が主流だが、三河(県南西部)では「章姫(あきひめ)」「紅ほっぺ」を主流で栽培している。因みに三河での「章姫」「紅ほっぺ」はクリスマスを挟む12月~1月前半に出荷ピークを迎える為の品種選定だが、尾張での「ゆめのか」は1月後半から出荷ピークとなる。気候の違いもあるが、好む品種の地域性もあり、県全体での1品種に絞る事は当面難しい様子だそう。イチゴの旬は一般的に1月から5月の連休あたりまでといわれている。寒い時期は実の成熟期間の長さから甘い品種が多いが、春は甘さと酸味のバランスが良く食べやすい品種が多くなる。連休に苺狩りなどいかがでしょうか?(大阪支店)

当社は4月27日(土)~5月6日(月)まで休業とさせていただきます。10連休の方も多いと思いますが、楽しい休暇をお過ごしください。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp